

長谷部美佳

『結婚移民の語りを聞く  
——インドシナ難民家族の国際移動とは』

(ハーベスト社、2021)

小川 玲子 (千葉大学)

本書はインドシナ難民の家族として呼び寄せられた女性たちの語りを中心とした国際移動とジェンダーに関する研究成果である。著者の関心はこれまであまり可視化されてこなかったインドシナ難民の配偶者として来日した女性たちである。複数の選択肢の中から彼女たちはどのような動機によって結婚という手段を選び来日することになったのか、国際移動とジェンダーはいかなる構造によって支えられているのか、ということが本書の中心的な問いを構成している。

インドシナ難民とは1975年のベトナム戦争終結に伴い、ベトナム、ラオス、カンボジアの3か国における政治的混乱により、母国を逃れた人々を指す。同年、アメリカ船に救出されたベトナム人が千葉港に到着したのが最初の事例であり、日本は初めて難民と向き合うことを余儀なくされた。1981年に難民条約を批准してから40年が経過したが、日本の難民研究の蓄積は豊富であるとはいえず、主として法学や人権の観点からのものが多い。インドシナ難民に関する研究はあるものの、難民の家族形成に着目した研究は少ないため、本書は難民から難民家族へのシフトがどのようなジェンダー規範によって支えられているのか

についての貴重な知見を提供している。

本書は全体8章から構成されている。序章は、著者がはじめてカンボジア出身の女性であるカートと神奈川県の県営住宅にほど近い日本語教室で出会う場面から始まる。カートはカンボジア人男性との結婚を契機に来日したが、来日後1年が経過しても日本語を継続して学ぶ機会がなかった。県営住宅にはカートと同様に結婚を機に来日した多くの女性たちが暮らしており、インドシナ出身者の5世帯に1世帯くらいの割合で存在していた、という。そして短期滞在ビザで来日するインドシナからの新規入国者数が1995年以降急増していることに着目し、親族訪問を利用することで難民の家族形成が進行していることを指摘する。

家族形成による定住と並ぶ本書のもう一つの論点はPiper and Roces (2003)によって提起された女性の国際移動を見る際の「妻か労働者か」(Wife or Worker?)という問題である。従来の移民研究では移住女性は結婚移民か労働者というカテゴリーに分断されており、2つの間の相互連関は必ずしも明らかにされてこなかった。しかし、著者によればインドシナ難民の妻たちは口々に「仕事がしたい」、「自分の国には仕事がない」と語っており、

結婚の背景には経済的動機があることに着目し、なぜ彼女らは複数の選択肢の中で結婚という選択肢を選ぶのかと問うている。そして、その動機はいかなる主体性によって生み出され、いかなる構造によって結婚という手段に方向づけられるのだろうかと問題提起する (p26)。本書はそこから、彼女たちが「妻であること」「母であること」「嫁であること」「働くこと」を分析の焦点に置く。

第1章は本テーマに関する先行研究として難民研究と移民研究の蓄積を整理している。難民研究においては難民の社会適応や定住先での経験についての分析はあるものの、なぜ難民が新たな人の移動を発生させるのかについての知見はない。移民研究の構造化論的アプローチ (Giddens, 1984) では、移民が生み出されるメカニズムを個人の主体性とグローバルな社会経済構造やネットワークの相互作用として捉えてきたが、これまでの研究はジェンダーには関心を払ってこなかった。一方、文化人類学において結婚移民は「上昇婚」に倣って「グローバルな上昇婚」(ed. Constable, 2004)として論じられてきたが、そこでは「女性の意思や主体性、彼女たちに提示される選択肢の問題、その結果として彼女たちが結婚移民という移動の形態を採るまでのプロセス」(p43)が見えなくなると著者は述べている。

そこで本書は「再生産労働の国際分業」(Parrenas, 2001)という概念に着目する。再生産労働の国際分業とは、女性が家庭内で無償で担ってきた労働が、グローバルな資本主義の下で移住女性によって担われるようになることを表している。再生産労働は外部化されても低賃金であるため移住女性を引き付けるが、全ての再生産労働が外部化されるわけではないため、無償労働の担い手として結婚移民に対する需要が生まれる。移住労働者と国際結婚という形で有償と無償の再生産労働に分断されてきた移住女性は、出身国と移住先のジェンダー規範の影響を受けることから、連続性として捉えられるというのが本書の主張である。

第2章では調査地と調査方法が説明されている。

調査は、著者が日本語学習ボランティアや生活相談スタッフとしてかかわりのあるベトナム出身者6名、カンボジア出身者4名へのインタビューと参与観察を通じて行われた。調査方法は質的調査が選択されるが、その理由としては、第1に対象者に関するデータが皆無であることから量的調査は不可能であること、第2にインドシナ難民の移住の動機やその判断に至るジェンダーを含めた構造的な要因について明らかにするには質的調査が望ましいと考えられるからである。

第3章は女性の選択肢の在り方を決める構造的な要因として、妻になる決断がどのように行われたのかを論じている。ここでは彼女たちが結婚を選択する動機として嫁き遅れによるジェンダー規範からの逸脱や経済的な動機に加え、親族ネットワークを通じた結婚は社会的に承認された行為であることが指摘されている。さらに妻が社会的に安定した地位であることに比べて、海外就労となれば家事労働者かセックスワークかのどちらかに限定されてしまうジェンダー化された労働市場の問題があげられる。

第4章は「本国の妻を必要とする夫たち、本国の『娘』を必要とする女性たち」と題し、定住したインドシナ難民の男性が、なぜ日本人女性でも在日インドシナ難民女性でもなく、出身国の女性を呼び寄せるのかについて論じられている。まずインドシナ難民の夫たちの就労は不安定であり年齢差も大きく離婚歴がある人もいるため、日本人女性との結婚は不可能ではないにしてもハードルが高い。また、在日インドシナ難民はどの年齢層においても女性が少ないことに加え、日本社会の価値観を身に着けているため「伝統的で従順」な出身国女性が好まれるという。そして、10人のうち8人が夫の母や叔母にあたる女性が3親等以内の親族を呼び寄せていることから、日本社会で困難を抱えたインドシナ難民女性が自分の妹や姪を妻として呼び寄せることで、経済的にもケアの点でも担い手を増やすことが出来ると分析する。特に長年日本で暮らしていても日本語の会話がお

ぼつかないインドシナ難民の高齢女性にとっては、母語で会話することが出来、伝統的な嫁役割を果たしてくれる本国出身の女性が最も好ましいという。

第5章では家族の呼び寄せと労働という2つの移民政策の論理が対置され、先進国の政策が個人の選択肢に与える影響について論じている。まず自国の市民権を持つ者による家族呼び寄せは「人道的、道徳的」義務に基づいており、アメリカでは呼び寄せ可能な家族の該当者は広く設定されているが、実現までには長い時間がかかる。それに対して日本では定住者であるインドシナ難民の配偶者呼び寄せは短期間でできるため、利用可能な選択肢となる。一方、移住労働者となった場合、先進国において移住女性が就労可能な仕事はしばしば低賃金の3K（キツイ、キタナイ、キケン）労働と言われる人手不足の分野に限定されており、希望の職種に就ける可能性は低い。そうであれば、研修やマッチングなどをいわば勝ち抜いて社会的地位の低い職種に就労するよりも、特権的な親族ネットワークを通じて妻として移住した方が有利な選択肢になる。そして、妻という地位を手に入れることができれば、就労の制限を受けることなく働くことが出来るため、結婚は合理的な選択肢となる。

第6章では女性たちの定住過程が取り上げられる。ここでは妻であり嫁であることが就労する上では両義的に働くことが説明される。妻であり嫁であることはコミュニティからの仕事の紹介という点では有利に働くが、同時に子育てや姑の介護などのケアの負担が重くのしかかるため、仕事はおろか外出すら難しくなってしまうケースもある。またDV被害に遭った場合には在留資格の更新や生活基盤を失うという問題があり、重要な資源である移民コミュニティからの断絶というリスクを冒してまで離婚に踏み切ることは難しい。インドシナ難民の妻は日本人男性と結婚した外国人妻と同様、婚姻によって法的な地位は保障されるが、妻であり母であり嫁であるというジェンダー

規範による制約から逃れることが出来ないというジレンマを抱えている。

第7章では、来日前に思い描いていたようなキャリアを築くことが出来なかった女性の状況が描かれている。夫は借金があって失業中であり、子どもを抱えて単純作業に従事せざるを得なくなった女性にとって自己実現への道は遠い。どうやらジャパン・ドリームはなかったようである。それでも彼女は出身国の家族に対して送金することで「疲れてても仕事がんばらなくちゃ」(p167) と思っており、母であり、妻であるという制約を受けながらも日本と出身国の両方の家族を支えることが、異国での彼女たちの生活の拠り所になっていると述べられている。

終章では再生産労働の国際分業論に立ち戻り、移住女性に対する需要の背景として、先進国の女性の地位が変化したにもかかわらず、再生産労働は女性の労働であるという社会のジェンダー構造には変化がないこと、再生産労働の担い手不足が生じたとしても低賃金であることから移住女性を必要とすること、さらに結婚が難しい男性はケアのニーズを満たすために出身国からの「伝統的な」女性を求めることが論じられている。著者は女性たちの移動における全てのプロセスでジェンダーが影響しているが、どれほど構造的な制約があろうと女性たちは自分の人生の選択肢を主体的に選び取っていることを主張する。

本書は以下の点で学術的・社会的貢献をしていると言える。第1に国際移動とジェンダー研究の観点から見ると、国際結婚に関する研究は多いものの、日本においては日本人男性とアジア人女性の結婚を扱ったものが主流であり、難民とその配偶者に着目した研究は管見の限り見当たらない。本書は、難民であることと妻・母・嫁、そして労働者であることの重層性をジェンダー規範という観点から明らかにしており、難民の定住化とコミュニティの再生産に対して新たな光を当てるものである。特に、再生産労働は家族の一員として妻や母が無償で担う場合もあれば、移住労働者

が賃労働として担う場合もあり、移動した先で移住労働者なのか妻なのかは固定的なものではない(Lan, 2003; Piper and Roces, 2003)。その中でも本書が主張するのは、インドシナ出身の女性たちが労働移動か国際結婚かを選択する移住のプロセスそのものがジェンダー化されており、送り出し国と受け入れ国のジェンダー規範と入管政策に則ってより望ましい選択を行っているという点であり、女性たちの語りの中から結婚と労働が二項対立的ではないことを実証的に説明している。

第2に再生産労働の国際分業を論じたパレーニヤスの指導教員であったアメリカの社会学者のホックシールドは、再生産労働の国際分業論を発展させ、グローバル・ケア・チェーン(GCC)と名付けた(Hochschild, 2000)。GCCは豊かな社会のケアの危機を背景として、ケアを担う労働者が途上国の地方と途上国の都市、そして先進国の世帯へと移動していることに着目し、グローバル化するケアの不平等な分配を問題化した概念である。GCCはジェンダーだけでなく、人種や階級による差異を伴って形成され、先進国の家族は余剰価値としてのケアを受け取ることが出来るが、出身国に残された移住労働者の家族はケアされない、というアポリアを生み出している。ホックシールドはケア・チェーンを有償労働を前提として構想しているが、本書ではインドシナ難民のエスニックネットワークに基づくケア・チェーンが構築されていることが見て取れる。つまりケアの危機は移民コミュニティの中にも生じており、その対応策として同じエスニシティの女性ネットワークを活用したケア・チェーンが「妻の呼び寄せ」という形で形成されているのである。インドシナ難民のケア・チェーンは、難民の妻の呼び寄せに留まらず、生まれた子供が日本で育てられなければ一時的に出身国の両親に預けたり、出身国の家族への送金という形で双方向で重層的なトランスナショナルネットワークを形成しているのである。

第3に、日本人男性とアジア人女性の国際結婚

の研究においては、日本人女性には求めない「伝統的な嫁」をアジア人女性に投影してきたことが指摘されてきたが、本書ではインドシナ難民コミュニティ内においても「伝統的な嫁」が求められることが説明されている。しかもそれが男性側からだけの要求ではなく、日本語があまりできない夫の母がケアをしてくれる嫁の存在を必要としているという点が明らかにされている。日本で暮らす移民の高齢者はインドシナ難民に限らず増加しており、「伝統的な嫁」を求めるコミュニティのジェンダー規範が日本社会との交渉の中でどのように変化していくのか・行かないのかは今後の課題であろう。

日本では2000年に介護保険が成立し、高齢者介護を公的社会保障によって支える制度が開始された。インドシナ難民をはじめとして在日コリアン、日系人、中国帰国者、在日フィリピン人などの移民コミュニティでも高齢化が進行しており、介護が必要なケースも増加している。介護保険は国籍に関係なく誰でもサービスを受けることが可能であるが、日本の介護サービスを使うには言葉や文化の壁があり、日本人の高齢者と一緒の施設では食事も話しも合わないため、公的介護サービスは受けない・受けたくないという移民の高齢者は多い。そのような移民コミュニティが本書のインドシナ難民のようにケアを私事化し、「伝統的な嫁」の呼び寄せという形で再家族化戦略を採用するのか、日本の公的介護サービスに包摂されていくのかはまだ未知数である。高齢期を迎えた移民にとって言葉が分からない異国で老いることへの不安は大きく、日本も移民の定住を前提とした包摂的な移民政策を考えるべき時に来ている。

最後に本書はインドシナ難民の女性たちの移動における全てのプロセスでジェンダーが影響しており、彼女たちを自律的に移動する主体として位置付けているが、トランスナショナルな移動によるジェンダー規範の社会的構築と変容については多くは語られていない。「望ましい妻」や「あるべき嫁」と同時に理想的な夫や父親に対する言

説はどのような場において生成し、維持され、流布されているのだろうか。定住化が進行するインドシナ難民の女性たちや男性たちが日本社会と接点を持つ中で、ジェンダー規範に挑戦し、問い直すことができるような利用可能な言説は日本社会に存在するのだろうか。移民コミュニティにとって何がジェンダー規範を変化させる契機となるのだろうか。インドシナ難民の定住化を国際移動とジェンダーの観点から論じた本書は、日本で暮らす多くの移民難民コミュニティに対する調査方法や支援、定住を前提とした政策立案を考える上で重要な知見を提示してくれている。

#### 参考文献

- Constable, N. (eds.), 2004, *Cross-Border Marriages: Gender and Mobility in Transnational Asia*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Giddens, A., 1984, *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Berkeley: University of California Press.
- Hochschild, A. R., 2000, "Global Care Chains and Emotional Surplus Value," Hutton, W., and Giddens, A. (eds.) *On The Edge: Living with Global Capitalism*, London: Jonathan Cape.
- Lan, P.C., 2003, Maid or Madam ? Filipina Migrant Workers and the Continuity of Domestic Labor, *Gender and Society*, Vol. 17(2): 187-208.
- Parreñas, R. S., 2001, *Servants of Globalization: Migration and Domestic Work*, CA: Stanford University Press.
- Piper, N. and Roces, N. (eds.), 2003, *Wife or Worker?: Asian Women and Migration*, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers.